
不器用な細工師in神殿

柏原 福子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

不器用な細工師in神殿

【Nコード】

N0961Z

【作者名】

柏原 福子

【あらすじ】

11歳の時から後宮生活に終わりを告げる。侯爵家の次女リアーナは皇帝に愛されることなく9年という時を過ごす。疲れ切っていた彼女は幸いにして『細工師』でもあった。『細工師』とは、武器、防具、装飾品に生活用品、あらゆるものに魔法を発動させることができる細工を施すことができ、魔法使いと同じく需要ある職業だった。多くは帝都に個人の店を構えるか、ギルドに入るか、(少し違う事もあるが)どちらにしても食いっぱぐれることはない職業である。

後宮にはいたくないし、食っていける仕事もある。こうなりゃ、脱走するしかないわよね。・・・そんなこんなで細工師となつたわたしだけど、なぜか滅多に勤めることがないはずの神殿に勤めている。ここ、後宮からも、城からも近いんですけど・・・orz
そんなリアラーナの笑い（予定）もシリアス（は、）も戦い（未定）もラブ（！！）もありなそんな話。 優柔不断な作者の処女作です。

脱走します

運命だと思った。

わたしとあの人の間に阻むものなんて何もなくて、すぐにでもあの人の婚約者になって、幸せな結婚をしてあの人の隣で微笑んでいくはず。

これが十二の時。

でもそれは、ぜんぜん確かな未来じゃなかった。だって現に、わたしは未だに後宮にいる一人のお妃候補。正式な婚約者じゃない。

もう何度、「なぜ」ということを考えていたんだろう。自分が悪いような気がして、派手な生活なんて楽しめるわけがなかった。

これが十五の時。

もう、考えるのも嫌で、周りの人全員の視線が嫌で、新しく入ってくる人が嫌で、でも意地を張ることも出来ないわたしはまた一段と地味になった。

これが十七の時。

そして今、婚期なんてもうとつくに過ぎていて、つらい現実を少しは受け止められるようになった。もう九年間同じ窓から同じ景色を見ている。

そこに広がるのは、美しく燃えるように鮮やかな夏の花も枯れ、深い色を帯びた秋の花も枯れ、花は確かに有るけど物足りない冬の景色

そんな寒そうな景色に反して、わたしのいるこの場所は暖かくて後宮の中でも最上級にあたる豪華な部屋。

豪華ではあるけれど後宮に入る前に見たことのある細工師の部屋に似ている、貴族の娘が使うとは思えない部屋。

今、二十となったわたしは、この部屋を出ようと思う

準備です

後宮に入る前から持っていたものの中で売って路銀になりそうな宝石や装飾品を取り出して鞆にしまっ。

それに食べていくための道具も。この日のために手に入れた平民が着るような質素なブラウスとズボンをすぐに取り出せるようにと一番最後に鞆に入れて用意が終わる。

そして、髪を切る。いつも顔を隠すように伸ばされた前髪と小さい頃から細やかな手入れがされ、緩やかな曲線を持つ腰まである髪を肩まで。

後宮でのわたしの目印なんて、この長く伸びたこげ茶色の髪と後宮にしては地味な装い。これがなくなれば、多くの人にはわたしが誰かなんて直ぐには分からない。

最後に目深にフードをかぶって完了。

部屋を抜け出し、堂々と裏門に向かう。

見つからない自信があるわけではない。

だが例え、わたしが誰か分かるうと、このリアラーナ・アガト・フランチェスを咎めるなんて、よほどの人で無ければしない。

まず、わたしは王弟の公爵家の三姉妹の次女であって後宮の中での

地位も確固たるものであるから。

次に、わたしは不気味だから。わたしは部屋に籠もる事が多い。それは、わたしの趣味（もう、趣味の域から超えているけど）が細工だから。

後宮に入る前、わたしは家を抜け出したときに知りあったおばあさんにときどき会いに行っていた。

そのおばあさんが細工師だって知った時、おばあさんに頼み込んで弟子にしてもらった。

それから二年後、後宮に入ることになったときは、「せつかく見込みがあつたのに教えられなくなつちまつたじゃなか！」と怒られてしまった。

その時は嬉しくて、寂しくて泣いてしまった。

そして、数冊のノートを渡され後宮に行っても勉強できるようにしてくれた。

それを読むとき、師匠様の事を思い出して後宮での寂しい思いも和らいだ。

それに、後宮に入って私の細工の技術は見る見る上がっていった。

誰も訪れないような後宮の生活は何かを必死にやっていないと辛過ぎたってという皮肉な理由があるけど。

でも、結局細工をしているとき、師匠様のことを思い出せて本当に

嬉しかった。

そんな訳で、何が行われてるか知らないのに、ほかの人は閉じられた扉の隙間から刃物を研いだり、宝石を磨り潰すような音が聞こえるのは不気味だと感じるのだろう。

後宮の妃候補の部屋からなら尚更だ。

魔女的な何かを行っているのでは・・・と。

そんな噂に拍車をかけるように、わたしの顔半分は髪で隠れていた。王が一度としてわたしのもとに来なかったという事と少しずつ入ってくるわたしよりずっと綺麗な人たち。わたしがお飾りであることは直ぐに分かる。

まあ、いくら閉鎖的な後宮だからといって、身分の高いわたしを表立って苛めてくる人もいなかったから、恵まれてはいるんだと思う。だからといって、自分に自信の無いわたしが堂々と出来る訳が無く、年を重ねるごとに前髪は長くなった。

そうして、わたしの前髪は不気味さに拍車をかけることになった。

けど、この前髪は結構役に立つ。

気持ちがふさいでいる時、外と隔ててくれている様で落ち着ける。

まあ、もう切っちゃったけど。さすがにあれでは、見つかってしま

うから。

そんな訳で怪しく、なおかつ、貴族としての身分なら後宮のどの姫よりも高いわたしには触れないのが一番と定着した。

わたしの侍女達でさえ、わたしを飾ることを諦め、距離を取っていた。

「うっ、……うっ。……あは、無理よねえ……」

掠れた嗚咽が次第に大きくなる。

それでも足は止めない。

涙が、ゆがんだ口の横を通り過ぎる。

頬に触れる涙は温かく、嗚咽は、もうどうにも抑え切れなくて獣のような唸りが喉の奥から出てきた。

……ずっと、ずっと。朝起きても、庭を散歩していても、細工をしていたとしても、あの人を一目遠くからでも見れて、嬉しいはずの時でも。

胸の辺りには四方八方から押さえ込まれるような苦しさがあつた。それに慣れたと思っていた。もう無くなったのでは、と思っていた。

……けど、無くなっていたなら今、ここにあつたのは高揚感なんだろう。

あいかわらず続く苦しさは、あの人とは結ばれるどころか、一度として会いにきてはくれなかった、その事への失望感、惨めさやそれでも声をかけて貰いたくて待っても結局来てくれる事はなかった日々を思い出すと感じる、引き千切られるような切なさを思い出させる。

それでも、好きなんだ。そのはずなんだと思い続けてしまつて。

最初は、細工に没頭するために部屋に籠もっていたつもりじゃなかった。

もし、あの人が会いに来たとき、直ぐにでも会いたかったから。

でもみんな勘違いしてたし、わたしもそのほうが良いんだって思っ
て言い聞かせて。諦めたんだ、もういいんだって思ったつもりにな
って。

わたしはまだまだ現実を受け入れていなかったのだと、今になっ
て気がついた。

もう、ボロボロなわたしの胸に容赦なく加速する圧迫感と刺さっ
てくる刃。

視界が霞むのは、涙のせいだけではなかった。ずっとずっと続いて
いた心労に、更に加わる痛み。

体は限界だった。子供のように大声で泣き叫んだ後、ぷっつりと
アラナーの意識は途切れた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0961z/>

不器用な細工師in神殿

2011年12月3日20時39分発行